

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1999年7月 No.105

胎児を守る運動

7月13日

日本生命尊重の日

胎児の人権宣言

前文

人間ひとりひとりが、受精の瞬間から自然死にいたるまで、生来の尊厳と固有の価値を有するので、今日我々は公けに以下の六ヶ条の宣言に同意する。

第一条

我々は、胎児ひとりひとりが、受精以後の発育のすべての段階において、人間であるという科学的事実を確認する。

第二条

我々は、本宣言に定められている権利を、人種、胎児年齢、性別、国籍、宗教、社会・経済的出自（生まれ）、障害の有無、その他のいかなる理由によっても差別することなく、尊重する。

第三条

我々は、胎児が、1948年の国連の人権宣言に述べられている胎児以外のすべての人間の基本的権利と同様の権利を有することを確認する。我々は、この権利が立法によって認められることを要求する。

第四条

我々は、胎児ひとりひとりが良好な胎内環境で発育する権利を有することを認める。この環境には出産までの母親の適切な保護と両親への支援を求める権利が含まれなければならない。

第五条

胎児が、受精の時から、科学的、医学的、または医学的実験や利用に供されない権利を有することを確認する。ただし、この実験や利用が胎児に直接役立つ場合を除く。

第六条

我々は、胎児の発育とそれに関する諸問題についての科学的事実の教育の推進に努める。また我々は、女性が子供を産み育てるのを難かしくしている社会的、経済的ならびに法律的諸条件の改善に努める。結び

以上にかんがみ、我々はすべての国際団体、政府、組織、ならびにすべての善意の人々が、ここに含まれる各箇条を公認し、実行するように強く奨める。

自殺・世俗的な見方

何世紀の間、ほとんどの西洋社会において、自殺は受け入れられてこなかった。それがアメリカでの一九六〇年代における社会の大変動の結果、個人の権利の主張が増加し、それに伴って、責任が軽視されるようになった。この個人主義が注目されるという事は、多くの人が、自殺について考え直す事につながったのである。多くの人は自殺を個人の独立性の究極の表現であるから、社会的にも受け入れられるべきで、場合によってはそれは尊敬に値すると見ていた。

自殺・神学的な見方

人が自分自身の死をコントロールする権利が、社会で受け入れられるにつれて、自殺を肯定したり、自殺に成功する為の方法を伝授したりする、沢山の記事や本が出廻るようになった。自殺という行為は、多くの場合、絶望からくるものであり、解決できない問題への解決法である。自殺の背後にある理由や動機は、通常コンプレックスであり、それは多くの場合、うつ病や他の精神的病気の結果である。神を知らなかったり、神を拒絶したために絶望してしまった人にとって、場合によっては自殺が、「たった一つの答え」に見えようのである。

キリスト教徒達は長い間、「私達は私達自身ではなく、創造主である神から与えられた命、神のイメージに似せて造られた（創世の書 一：27）命の世話係りである」という考えを主張してきた。この考えはずっと昔からのユダヤ・キリスト教の自殺は間違っている、という信念に見る事ができる。聖書の中にははっきりとした自殺の禁止はないが、殺しを禁じる十戒の一つ（脱出の書 二十：13）を、他の人に対してだけでなく、自分自身に対しても当てはまるものと解釈する事が多い。

また迫害が当り前だった頃の初期の教会では、自殺（命を奪う事）と殉教（命を犠牲にする事）の境目の線がはっきりしていなかった。初期の教会の教えの一

部は、そんなジレンマをはっきりさせる為に始まったのかもしれない。アウグスチンやアケイナスは、自殺に対するキリスト教の現在の立場を築く、最初の責任者であった。

自殺による問題点の一つは、本人、社会、そして神に影響する、その考えである。それはまず、愛されているにも関わらず、その人本人にしかない特別な責任を持つているのにも関わらず、耐える事を拒否しているのが明らかだという事である。次に、他で問題を抱え苦しんでいる人達の意気をくじいてしまう結果になるといえる事である。たとえ患者を苦しみから離すという動機であったとしても、それは私達皆んなをつなげ、生きる上での苦しみの中で支えてくれている

鎖を壊してしまふものである。第三に、自殺するという事は、この先に受け入れられる未来がない、つまり、神にそんな未来は期待できない、という事である。自殺する事は、神がそれまで与えて下さった人生のゴールがいつなのか、あたかも自分で知っているかのように、自分の人生の終わりを決めようと試みる事である。しかしその人生に、この先、生きる目的があるかどうかを決めるのは神の特権である。

自分の命の最終の責任をわがものにするのは、人生のどの段階でそうするにしても、神を拒否する事である。聖書では確かにいろんな自殺の例を載せているが、それははっきり肯定も非難もしてはいない。聖書は、出てくる人々の失敗や成功を通してそのメッセージ

を伝えていく。自殺の道徳に占める位置を判断するのに必要なのは、聖書に出てくる他の関連した概念をもっと広く分析する事である。

キリスト教の教えは、ヨーロッパやアメリカ、日本におけるモダン・ホスピスの動きの大切な部分に、影響を与えてきた。沢山のキリスト教徒達、他の人達も、死にゆく人々に対して、「自分で自分の命を奪ってはいけません。」と言うだけでは十分でない、と信じている。その替わりに、この非常に辛い時を過ごすのに、患者達やその家族の肉体的、心理的、そして精神的な問題を、助けてあげるようにしなくてはならないのである。

ロバート・D・オア 医学博士
ハロルド・O・ブラウン 哲学博士

自殺幫助と安楽死・世俗的な見方

言葉の定義がはっきりされていないと、自殺幫助や安楽死に関する議論は、混乱しがちである。自殺幫助とは、ある人が自分の命を絶ちたい時の手助けとして、医師や他の人がその人にアドバイスしたり、死を招く薬を

処方したり、その人が自分で死ぬ事ができるように策を考えた事である。医師や他の人の役割は、専門的意見や知識を与える事だけ。実際の行動は、その患者本人がするのである。自殺的安楽死とは、苦しんで

いる患者自身の要求によって、その患者の命を終わらせるべく、他の誰かが行動を起こす事である。消極的安楽死とは、自殺的と同じ様な他者の行動によるものだが、患者が自殺的な要求をす

る事ができない(例えば意識不明や痴呆症の大人や乳児や子ども)場合である。それは苦しんでいると見られ、自発的な要求をしたいのしていないと見られる患者への、同情的な行動である。

ここ十数年間の社会の変化により、個人が自分の事を自分で決める権利が、注目され重視されるようになってきた。その中で自殺という行為も、人生が重荷になりすぎてしまった人による合理的な選択である、として受け入れられる事が多くなってきたが、それでもまだ自殺という、悲劇的で孤独な経験と見られている。そう思われるのは特に、命を絶つ方法に激しさがある時(例えば銃や自分自身を傷つける事や、首を吊ったりピルから飛び降りたりする事)である。だから、自殺を非個人的にする為に他の人も関わり(自殺

補助)、激しさをなくす為に薬による自殺方法(医師による自殺補助と安楽死)をとろうという動きがあるのである。

安楽死と自殺補助を合法化しようという支持者達は、医師達がこのような行動に関わる事について、何故社会がそれを許さなければならぬか、いくつかの理由を挙げている。それは何故かという、一部の人には、死

ぬの手伝ってくれる愛する人がいないから。人によっては、愛する人が自殺するのを手伝うなんて、嫌だしできないから。医師なら病症経過の予後がわかり、患者からの死の要求の適当さがよりの確に判断できるから。医師なら命を絶つ薬を処方でき、使い方も知っているから。そして、医師なら感情的に関わる事はないので、より客観的になれるからである。

一九八〇年代からオランダでは、安楽死は医師によって公然と行われてきている。正確な見積りによると、この国でのすべての死の3%が、医師によるものである。安楽死の対象を子ども達や知能指数の低い大人達への議論が行われており、専門的には、医師が直接患者を殺すのではなくて、医師による自殺補助という形へシステムを変える傾向がある。

直接殺す形にしる、間接的に死を誘導するにしろ、医師が死に関わるのを認めるという事については、医師と患者の関係上必要な要素である信頼をひどく弱めるのではないかという専門的危惧がある。もし安楽死が認められたら、ひょっとしたら医師は、同情心や自分の為(例えば患者の治療が難しすぎたり負担になった時)に、患者の要求なし

に、患者の命を終わらせたい誘惑に駆られるかもしれない。

自殺補助と安楽死：

神学的な見方

聖書に基づいて見て、安楽死が基本的に間違っている所は、それが、神のイメージに似せて作られた(創世の書 九：6)無実な人間を殺す事であるからである。人間が人間(自分自身)を殺しの従犯となる他の人の助けを借りて殺すという同じ理由で、医師による自殺補助も間違っているのである。患者の独立性(というより、自由)は、神の主権の中で理解されるべきで、それには自分のものでないものを処分する権利は含まれていないのである。(「あなたたちの体はその内にある神から受けた聖霊の聖所であって、自分のものでないと知らないのか」コリント人への第一の手紙 六：19)

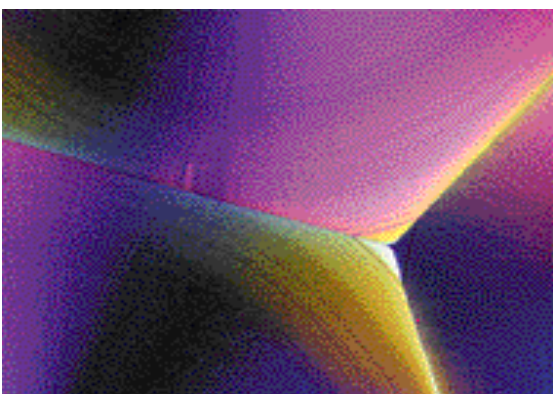
ここでの基本的な疑問とは、それに対して神あるいは苦しみそのものが、人の命や死をその代償として取り入れているかである。キリスト教信者である医師や患者は、どんな犠牲を払っても苦しみを取り除くという考えは、神の道に反するとしている。反さないのは、苦しい時は特に、聖書によって表わされた神の教えに従い続ける事なのだ。私達の人生の議題での究極な試練は、死と向き合いながらもいかに苦しみを担うかにあるかもしれない。

それはまさしくゲツセマネの園でのイエスに当てはまる。イエスは「私の魂は死ななばかりに悲しむ」(マルコによる福音書 十四：34)と言われており、ますますひどくなる一方の苦しみから救われるよう熱心に祈られた。しかし同時にイエスは、どんな苦しみもたらさせようと、それは神による大きな計画の一部であると断言された。苦しみが無いという事は、一般的に言えば良い事である。だからイエスはその様に祈られた。しかしそれは最良ではない。だからイエスは、膨大な苦しみに耐えようとなさったのである。

患者を殺したり、自殺する手助けをするのを「同情」と呼び、その言いなりになるのは別の理由からも誤っている。特に目の

前にいる人が、他の人の助けを心から必要としているのを見ると、人間の自己中心性は忘れられがちである。「慈悲殺」とは、そういう意味で使われていた。「彼女が苦しむのを見ていられたかったから殺したのです。」というのはその言葉通りである。それは殺した人自身の困苦から逃れる必要性が、まず、最重要に、殺しという行動に反映しているのである。患者を殺さない、又は自殺する援助をしないと一線を引く事は、一般社会の人々や特定の患者達を守るだけでなく、医師達や患者の代りに決定を下す人達をも、その弱さ、一生付いてまわるかもしれない自己中心的な判断を下してしまう事から守るのである。

ロバート・D・オア 医学博士
ハロルド・O・ブラウン 哲学博士



医者による自殺補助と神様

人間文化の構造が急激に変わりつつあります。この変化によって、特に医学の持つ意味が変化しているのです。

一九九六年一月二十九日、リンダ・ヘンズリーさんの遺体が、オークランドの病院の外に駐車されていたバンの中に放置されているのが発見されました。そのバンはジャック・カポーキアン医師のものでした。リンダ・ヘンズリーさんはカポーキアン医師が補助した27人目の自殺者でした。

数ヶ月後、サンフランシスコでの第九回アメリカ巡回裁判で、八対三で、医師による自殺補助を重罪としているワシントン州の法律は憲法違反であるという判決がなされました。

もしその判決が有効であるならば、それによって、グアムや北マリアナ諸島ばかりでなく西部の九つの州で医師による自殺補助が合法化されることになるでしょう。自殺補助を長い間禁止してきた法律にも同様の変化が起きることは確実でしょう。

オレゴン州で同州の医師を対象に行なわれた調査では、医師の6%が自殺補助は医学倫理

上問題がないと答え、60%が場合によっては合法的と認められるべきだと答えました。93%の医師が、患者が他人の重荷にならないために自殺補助の依頼をするかもしれないと思うと答えました。また83%の医師が、経済的なプレッシャーから自殺補助を求める患者もあるだろうと答え、29%の医師が、自殺補助の合法化は、患者の同意なしに致死的薬物を過剰投与する事態を引き起こすだろうと考えています。

(ニューイングランド医学ジャーナル・一九九六年二月一日)

この三つのできごとによって、大規模な文化構造の変化が明らかになっていきます。死が迫っている患者たちは、医療とされる自殺の犠牲者となりつつあり、医師はその共犯者となっているのです。

何が起きているのでしょうか。私達はどちらに向かって進んでいるのでしょうか。危うくなっているのは何なのでしょう。これらはキリスト教徒にとっては非常に重要な問題です。

これらは21世紀を迎える文化にとって、非常に重要な問いかけなのです。

旧約聖書・新約聖書には、医師による自殺補助について何か書かれてあるでしょうか。神様はこのような重要な問題について何か語られているでしょうか。この問題に関する神様のお考えを私達が理解する手助けとなりうるような聖書の原理やキリスト教的な価値観があるでしょうか。

医師による自殺補助の問題について聖書に何か書かれてあるかどうか見てみましょう。医師による自殺補助を支持するために頻繁に用いられる論拠を検証してみましょう。そのような論拠にたいするキリスト教的な対応の仕方を考えましょう。

聖書を見る前に、「医師による自殺補助」とは、患者が自分の命を断つための手段を医師が提供する行為であることを私達が理解していることを確認しておきましょう。例えば、リンダ・ヘンズリーさんが自殺できるように、カポーキアン医師が彼のバンと一酸化炭素のガスボンベを提供したこと、あるいは医師が、死が迫っている患者に適量服用すれば死をもたらすような薬物を処方し、「さあ、もしこれら全てを

一度に服用すれば、どうなるかわかりですね。」と言うような行為がそれにあたります。

「一」聖書にはどう書かれてあるでしょうか

善悪の決定をする時、キリスト教徒は、大多数の人々が何が正しいと思っているかを知るための調査を行ったりはしません。私達は慣例と、イエス・キリストの教え、そして教会の教えを参考にします。倫理的な問題について、全てのキリスト教徒が問いかねなければならぬ質問とは、「神様は何と言っておられるか。」という質問なのです。

自殺補助に関して、私達は、自分たちが誰なのか、誰のものなのか、そしてキリストにどのような希望を託すことができるのかということについて聖書にどのように書かれてあるかを思い起こす必要があります。

まず、私達が誰であるかということですが、聖書は、地上の全ての生きものの中で、人間が特別な存在であることを明確にしています。創世の書第九章には、神様と人間との契約、特に神様とノアの契約を神様が更新された記述があります。その短い数節の中で、動物の命と人間の命には根本的な違いがあることがわかります。

「命あって動くものはみな、おまたちの食べ物となる。前に青草を与えたように、これらのものをみなおまたちに与える。ただ、血のある肉を食べるな。おまたちの血すなわち命については、たしかに私はおまたちにその使途を問うであらう。あらゆる生き物にもそれを問う。

人間の命については人間に、各人の命についてはその兄弟に問うであらう。人の血を流す者があれば、人の手でその血が流される。神は、自らのかたどりとして、人をおつくりになつたらだ。」(創世の書：九：3-6)

よく注意して下さい。動物は食物として殺してもよいのです。しかし、他の人間を殺すことは許されないので。実際、聖書にはノアの契約のもとで、一人の人間が他の人間を殺せば、その者の血が流されるだろうと書いてあります。なぜでしょう。動物を殺すことと、人間を殺すこととの間にはどのような重大な違いがあるのでしょうか。なぜ神様は前者を許し、後者を禁止されているのでしょうか。

聖書を読むと、私達は人間が特別なものであることがわかります。私達は、地上の全ての生きものの中で唯一、神様の姿に似せて造られているのです。創

世の書 一：27には、「神はご自分にかたどって、人間をつくりだされた。すなわち、人間は神のかたどりとし、男と女につくりだされた。」と書かれてあります。

アトランタにあるエモリー大学のヤークス霊長類センターで、研究者たちは驚くべき実験に取り組んでいます。彼らはチンパンジーに身振り言語を教えているのです。チンパンジーは記号を指差して、「私はバナナが欲しい。」とか、「ココは気分が悪い。」といった初歩的な文を伝えることができます。これらのチンパンジーは先生に教えられた物真似をしているのはありません。彼らは実際に新しい文、つまり身振り言葉で先生が今までに使ったことのない文を作り上げているのです。大人のチンパンジーは三才児ぐらいの知能を持っています。と見積もられています。

哲学者であり、動物の権利を擁護する活動家であるオーストラリア人のピーター・シンガーは、大人のチンパンジーを殺すことは、胎児を殺すこと、さらに新生児を殺すことよりも非人道的なことだと考えています。その理由は生後六ヶ月の子どもはチンパンジーより言語能力が劣っているからだと言っています。

それでは、幼児を殺すことは道徳的に許されることでしょうか。もちろんそんなことはありません。

胎児や新生児や老人を殺すことが間違っている理由は、言語能力や思考力や他のいかなる機能的な能力に基づくものでも決まておりません。人間を殺すことが間違っている理由は、人間だけが神様の姿に似せて造られているからなのです。私達は神様の姿を映したもののなのです。それが私達が何者なのかということなのです。

次に、私達が誰のものなのかを考えてみましょう。ローマ人へのパウロの言葉に耳を傾けてみましょう。

「私たちのうちだれも自分のために生きる者はなく、自分のために死ぬ者もない。私たちは生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。生きるも死ぬも主のものだからである。はたして、キリストが死んでよみがえったのは、死んだ人々と生きている人々を支配するためである。」(ローマ人への手紙：十四：7-9)

人間が特別なものであり、人間の命が神聖なものであるばかりでなく、あなたも私も主のものなのです。私達は自分のもの

ではないのです。私達の命も私達のものではないのです。私達は、高値で買われたものなのです。(コリント人への第一の手紙六：19-20) 私達は死んで生き返られた神様のものなのです。そしてパウロは、ローマ人への手紙：十四：12の中で、「こうしておのおのは神に自分のしたことを報告するであろう」ことを私達に思い起こさせてくれているのです。

これは根本的に文化に逆行する概念です。私達は個人の自由(または自己決定)が全ての道徳的な決断における「切り札」となっている時代に生きています。

中絶の議論においては中絶支持者が、誰にも女性にその人自身の体をどうすべきかを指図する権利はないと主張しています。

それは女性自身が決めることなのです。同性愛の議論においては、同性愛の支持者は、セックスの相手について他人にとやかく言うことは誰もできないと主張しています。彼らは、「私達のベットルームに立ち入らないでくれ。」と叫ぶのです。

そして、自殺助の議論においては、第九回巡回上告裁判によると、「末期病の人からそれを選択する権利を奪うことは」アメリカ合衆国では、憲法違反であるという宣告がなされたのです。

しかし、聖書は繰り返し人間の自己決定が全ての問題の根源であると断言しています。良い社会を造るためには、私達は謙虚に神の教えに従わなければなりません。キリスト教徒として、

私達はイエスと共に、「私の願いでなく、あなたの願いが成就されますように」と祈らなければならぬのです。自己満足はもはや私の望むものではなく、私のために死んでくださったイエスを喜ばせたいと私は思うのです。もはや私の願いが最優先ではなく、私にとっては神様の意志を実行することが喜びなのです。なぜでしょうか。それは私がイエス・キリストのものだからなのです。私はキリスト教徒であり、キリストのようになりたいのです。

ある老人の話があります。ある日、老人が道を歩いていると、手に鳥かごを持った少年が目に入りました。その老人は少年を止め、「何を持ってきているのかね?」と尋ねました。少年は、「ただの鳥だよ。」と答えました。その老人はかこの中の小さな鳥を見て、それが好きになりました。老人は子どもに、「何とだったらその鳥を交換してくれるかね?」と尋ねました。その少年は驚いた目でその白髪の老人を見つめて、「おじさん、この鳥とそっくりなのはあっちにたくさんいるよ。」と答えました。それに対して老人は、「でも、それが欲しいんだよ。」と答えました。そこで、少年は老人に鳥もかごも全部売ってあげました。

その話の続きはこうです。少年が見えなくなると、老人は鳥かごを持ち上げて、扉を開いて、「小鳥さん。おまえが気に入ったからおまえを買ったのだよ。おまえは私のものだよ。だからおまえを自由にあげよう。」と言ったのです。そして老人が鳥かこの後ろを軽くたたくと、小鳥は飛び出していきました。「自由に自由になった。ついに自由になった。」とその小鳥が言うのが聞こえるようだとその老人は言いました。

この話の意味がわかりますか。私達が享受している自由は何でもすきなことができる自由ではないのです。私達は代価を持って買われたので、天におられる私達の父を喜ばすことが自由にできるのです。私達はキリストの奴隷なのです。私達が神様のものであるという理由で、私達は神様に自由に従うことができます。

最後に、私達の希望とは何でしょうか。私達は永遠の命を希望しているのです。ヘブライ人への手紙を読んでみましょう。

「子らは血肉をともに有していたので、イエズスも等しくそれをもたれた。それは、死の力を持つ悪魔を死によって滅ぼし、死の恐怖によって生涯奴隷となった者を解放するためであった。」(ヘブライ人への手紙 二：14、15)

多くの人が死を恐れています。彼らは、死を避けようとして毎年たくさんのお金を使っています。私達は若さに取りつかれ、死ぬことを恐れています。しかし、キリスト教徒は、私達の代わりにその恐怖を全て経験されたかたによって死の恐怖から解放されたのです。

私は告白します。私は死が恐くはありません。正直に言えば、死ぬことについて恐れていることがいくつもあります。死は時に苦痛や麻痺を伴います。確かにそのようなことはいやなことですが、私は、死そのものは恐ろしくありません。なぜなら、イエスが私の代わりに死んで下さったからであり、また死は私を滅ぼすことがないからです。私はいつか死ぬでしょうが、それが終わりではないのです。死は永遠の命への始まりなのです。

だから、私達が自殺幫助について何を言っているも、それは私達が死を恐れているからではないのです。私達の自殺幫助に反対する主張は死に反対の主張ではなく、聖書が正当化していないことである、他人を殺したり、他人の死の幫助をしたりすることに反対する主張なのです。

「二」自殺幫助についての議論

自殺幫助を支持する人々の考えとは、どんなものでしょうか？人命を助ける使命を持つ医師を死の共犯者に変えてしまうことをいかにして正当化するのでしょうか？どのような議論のテクニックを使って主張するのでしょうか？

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの=one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる?天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [500] (本)生命問題に関する...(カトリックの教え)...2987 + 郵送料
- [501] (本)自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000 + 郵送料
- [503] (本)プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本)小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本)いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本)命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本)私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本)いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本)小さな生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本)赤ちゃん：最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本)経口避妊薬：ピル.....100 + 郵送料
- [516] (本)いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

その最も一般的な主張の概要を、ここに三つ紹介しましょう。それぞれについて私の意見も少々述べてみます。
* その1 彼らは、生命維持装置をつけな
いことと、患者の自殺を幫助することに違
いはないとしています。つまり、患者の換気装
置をはずすことと、自殺するための薬を与え
ることは、倫理上同じ事だと言っているの
です。
これは明らかに間違っています。患者に死
ぬことを「許す」ことと、患者が自殺できる
致死性の薬を「処方する」こととは、倫理上
違いがあります。前者の場合、患者を死に追
いやるのは病気そのものですが、後者の場
合、医師の助けを借りた患者自身が殺人行為
をすることになるからです。

患者が、換気装置やその他の生命維持装
置をはずすことを要求した場合、患者の命
を奪うのは患っている病気であり、傷害で
す。しかし、医師が患者に自殺する術を与え
た場合、患者の命は医師と患者自身によっ
て奪われるのです。
誤解を与えないように言っておきますが、
私は、末期患者を救うためには彼らの意思
に反してでもすべての治療を行うべきだと、
聖書が説いているとは思いません。一つの
日か、患者を快適にし、苦痛を取り除くこと
だけが大切だとする時代が来るかもしれな
いのです。「生まれる時、死ぬ時がある。」コ
レレットの書 三：2しかし、自殺幫助を
行うことは殺人の従犯者となることな
ります。

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬：ピル

注文：	1 - - - - - 5	1部 = ￥100
	6 - - - - - 20	1部 = ￥75
フルカラー	21 - - - 99	1部 = ￥50
	1000 - - 以上	1部 = ￥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

パンフレット申し込は・・・

1 ~ ~ 5	1部 = 35円
6 ~ ~ 100	1部 = 25円
101 ~ ~ 500	1部 = 20円
500 ~ ~ 以上	1部 = 15円

組み合わせは自由です

正当な理由のない意図的殺人は、明らかに神の掟に反します。「殺すな。」(脱出の書 二十：13)

* その2 医師は、患者自身が「いつ、いかにして死ぬか」を選択する権利を尊重しなければならぬという主張。大変根強い意見で、多くの人が共感しているようですが、これもまた明らかに間違っています。

私たちの人生における自律(自己決定)は、それほど絶対的な権利ではないことを理解しなければなりません。例えば、アルコールを飲んだ人が、自己決定権を行使して車の運転をすると言い出しても、それは許されないことであるのと同じです。

私たちは、自殺を防ぐために、多額の金をつぎこんでいます。自殺防止の専門家もたくさんいますし、緊急治療室の医師や看護婦は、自殺未遂者の命を救うために、常に多くの時間を割いています。

しかし一方で、医療の現場では、患者に事実上自殺を勧めているような側面もままあります。エドムンド・ペレグリーノ氏はクリスチャンの医

師で、同時に医療倫理評論家

でもありません。彼はこれまで何百人もの患者の死を見届けました。そして、死を目前に控えた患者の傍らで、その苦しみを和らげようと努力してきました。その中で、患者の自殺を引き起こすいくつかの「誘因」に気づきました。彼は、このように述べています。

「患者が安楽死を選ぶ時、その人は自分の自由を棄てるのである。自己決定という名のもとに、患者はそれに必要な生命と意識を無にすることを選んでいるのである。それは全ての未来のチャンスを失うことであり、予測はできないながらも、自由の基礎となる生命さえあれば、患者にとって重要な意味を持ったであろうものである。」

つまり、患者が死を選ぶということは、同時に全てのチャンスを失うことでもありません。治療を望むことも、家族と愛情を分かち合うことも、壊れた人間関係を回復させることもできません。死んでしまつては、神の善と慈悲を証明することは、もはやできないのです。

ペレグリーノ氏はこう続けます。「患者の苦痛があまりにも激しくて、他の全てのチャンスを制限してしまい、安楽

死が唯一の選択肢であるかの

ように見える場合でも、その選択は本当に自由なものではない。重病の患者は、よく孤独感や罪悪感や、自分は生きていてもしょうがないなどという気持ちに苛まれる。患者自身も他の人も、患者のことを経済的・社会的・心理的に負担になるものとしてとらえている。末期患者の苦しみの多くは、自分が人間らしく扱われていないことから生じている。

自由と自律への心理的障害を取り除かれ、身体的苦痛がうまく緩和されれば、多くの患者が安楽死を選択しないという証拠も出ている。(ザ・ジャーナル・オブ・クリニカル・エシックス、一九九二年夏号)「

医師や看護婦、教会の関係者は、患者の自殺に力を貸すのではなく、末期患者の多くが直面する感情的・心理的・精神的な苦痛を和らげるよう最善の努力をするべきなのです。末期患者に対する治療を止める決断を下した場合は、患者に対するケアをより手厚くするようにしなければなりません。医学的な治療と人道的ケアとは、必ずしも同一ではないのです。

医学的にこれ以上の治療はできないという場合でも、患

者の精神と感情の面に対して

は、まだできることがあるのが常です。そこで「ケア・チーム」を作り、つききりで患者を励まし、共に祈り、一緒に過ごすことができるようにします。こうすれば、看護している家族の負担も軽減できるし、道徳的・精神的なサポートもできます。末期患者のためのこのようなケアを、社会全体が担うようになるまでは、自殺補助はいくらひいきめに見ても「未熟」であり、悪くすれば「おそろしく非道徳的」な解決策なのです。

* その3 患者が苦しみな

がら死んでいくのを放つておくより、自殺に手を貸す方が人情になつた行為なのだというものです。

これに対しては、様々な対応の仕方があるでしょう。第一に、我々は確かにまだペイン・コントロールを十分に行

えていません。しかし、医療現場ではこのことを認識しており、世界中の病院でペイン・コントロールの研修が行われています。そして、「ペイン・コントロール・チーム」を持つ病院が増えていきます。米国がん学会と他の専門組織は、末期

患者がのたうちまわるような苦痛の中で人生を終えること

のないよう、ペイン・コントロールのガイドラインを作成しました。

第二に、いったん自殺補助が認められてしまうと、能動的安楽死に歯止めがかからなくなってしまうということ

です。もしも、自殺補助が世の中に認められるようになれば、これまで二千五百年もの間築き上げられてきた癒すための医療の伝統を投げ出してしまふことになりまふ。これまで治療者、医師と看護婦だった人が殺人者になり、末期患者は「生きる値打ちのない」人々、ということになるのです。

末期患者が「生きる値打ちのない」人生だと言うことが許されるようになると、医師や倫理委員会が患者の誰を生かし、誰を死なせるか、決定できるようになるまでそう時間はかからないでしょう。

聖書は、医師や友人、あるいは見知らぬ人など誰が手を貸すにせよ、自殺補助を厳しく戒めています。それは、人命の神聖さを犯すことだからです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 088-873-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

事務所時間：

月一金 12:00 - 18:00
日のみ 14:00 - 18:00
土曜日 休み

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円
一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

御送金

銀行：四国銀行朝倉支店
口座番号：0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント
郵便局：「郵便振替」
現在口座番号：01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

夏が来れば、思い出す
はるかな尾瀬、野の小道

7月には日本の生命尊重の日があります。それは13日で、最近購読しはじめて下さった方のために説明を少ししますと、昭和23年7月13日、日本で優生保護法が施行されました。優生思想だと言われ、今は、名前だけは母体保護法と変わりましたが、小さいのちが失われていることには変わりありません。いのちを失い始めた日を忘れないためにこの日に決めたのです。

高知新聞の3月28日の一面に多胎妊娠、減数手術容認、中絶胎児条項も新設と載っていました。それによると、『胎児条項新設理由として、病気や障害のある胎児の中絶が、現在、同法の「経済的理由」という要件を名目に広く行われている現状に問題があることや、こうしたケースでの中絶は女性の権利であることを指摘している。女性が中絶を自分で決められるのは、手術の方法や安全性の観点から妊娠12週未満が妥当だと提案している。』と書かれていました。

ちなみに、「日本プロ・ライフ・ムーブメント」資料の『赤ちゃん：最初の10ヶ月の旅』や『若い生命セット』でも分かるように、妊娠12週の赤ちゃんは心臓も動き、内臓各器官の発育もすばらしく、その形態も整って、親指をおしゃぶりしていることもあるのです。

女性にも、もちろん、男性にも、例えその子の親であつても、いのちを自由にすることは出来ないのです。その子が、生まれる前に大きな障害が分かって、生まれても寝たきりの生活を送ることが想像出来ても、いのちはいのちだから尊いのです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

(7ページから)

「三」 医者による自殺幫助にどう対応するべきか

医者による自殺幫助にキリスト教信者はどう対応するべきかを以下に数点挙げてみた。

「一」 聖書をきちんと読み、人間の命の本質について考えよう。私たちは人間として一体誰なのか。誰のものなのか。

「二」 神の善良さをきちんと考えよう。私たちは自分たちのものではなく、神のものである。私たちの創造者として、神は常に私たちに最善を尽くして下さい。不治の病は私たちの信仰や神への依存度を試すものである。

「三」 人間の苦しみの本質について知ろう。聖書には、神が私たちの生活においていかにして神の苦しみを利用されたかの教訓が数多く記されている。C・S・ルイス氏の「苦痛の問題」という見事な著作をお勧めしたい。

「四」 瀕死の状態の愛すべき人をそれまで以上に大切に支持してあげよう。旧約聖書におけるコヘレットの著者は、「どちらかが倒れば、片方がそれを助け上げる、だが、一人つ切りで倒れたら不幸なことだ。助け上げてくれる人がいないのだから。」(コヘレット 四：10)。人生の最後を迎えつつある兄弟姉妹を助けよう。世話をするグループや祈りを

捧げるグループを作つて患者との時間を過ごそう。本を読んであげたり、一緒に祈りを捧げたり、ただ患者のことを思っているかを伝えよう。ホスピスに参加してイエス・キリストの愛を伝えることもできるだろう。

「五」 医学関係者に苦痛の管理を改善するよう呼びかけよう。苦痛を和らげることは医学上賞賛されるべきことである。しかし、慈悲の名において患者の命を絶つことで苦痛を取り除くことを医者にさせたいけない。

「六」 医者による自殺幫助を認める法律を禁止する立法行為を支持するべきである。

「七」 祈ろう。医学、多くの点でこれ自体が神の贈り物であるが、治療する人々を殺す人々に変えることのないように祈ろう。

医者による自殺幫助は慈悲の行爲ではない。それは根本的にキリスト教の教えに背くものであり、自らの死を見つめる際の絶望から逃れる自暴自棄の文化による誤った試みである。

キリスト教徒には同世代の人々に非常に重要なメッセージを持っている。希望はある！この世のつかの間の存在を越える命がキリストにあることを期待するのだ。神は現世においても来世においても、誠意を持って神に近づく者には豊かな命を用意して下さる